「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」

マタイ６：9－13

堀田修一　２５・６・２２

Ⅰ「主の祈り」は主が教えられた世界で最も大切な祈り。すべての原則、要素が含まれている。「私たちの負い目をお赦しください」：１２。これまで、この祈りは、口語訳では「わたしたちに負債のある者を赦しました<u>た</u>ように」と過去形で訳され、新改訳でも 2017 年版の前の訳も、「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました<u>た</u>」と過去形でした。しかし、最新の新改訳の聖書の訳は「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦し<u>ます</u>」と現在形になりました。これは「赦します」の原語の時制が、アオリスト＝不定過去時制であるために、過去形に訳すこともできれば、現在形で訳す可能性、繰り返される行為とか時を越えた行為を表すこともあるのです。ですから文脈や聖書全体から判断して訳されます。またこの動詞の背後にヘブル語の行為遂行的な完了形があるとも考え得る。この用法は、「約束します」とか「お詫びします」といった表現に見られるように、当の行為の遂行を意味するものであるから、<u>現在形</u>で訳す方がふさわしい。他の人を赦し、自身についても神の赦しを求め続けていくということで、「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」と訳すことになった（「聖書翻訳を語る『新改訳２０１７』何を変えたのか」のＰ６７，６８を参照）。主は、私たちがキリスト者として生きる一生の間、自分の罪の赦しを求め、他の人を赦すように祈るように教えられた。これは、私たちの歩みにとり決して欠くことのできない重要な祈り。まだ、ある人を心から赦せていない時も、「赦します。赦す愛を下さい」と心から「主の祈り」を祈ることが出来るようになりました。証。

Ⅱ「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」：１２。「赦しました」ではなく「赦します」は主の祈りを祈り易くする。

１．私たちは、主に自分が赦されたように、自分を傷つけた人を赦したいと願う。しかし、心の傷が深ければ深いほど、赦すことは困難になります。私たちは心が傷つけられた時、その出来事を記憶する。それは未来に同じような危機的状況が訪れた時、記憶を用いて、より効果的に自分を守るように、神が備えられた自己防衛メカニズムとも言える。その傷の記憶は、時の流れとともに薄らいでいくと感じられても、ある事がきっかけで、その傷が再び私たちを苦しめる事がある。これまでの主の祈り訳で「負い目のある人たちを赦しました」と祈りながら、実は心の奥底では赦せていない事も多いのです。人を赦せない自分に幻滅し、自分を責め続けてしまう負のスパイラルに陥ることもある。「ある人を赦せない気持ち」とどう向き合えばよいのか。自分を傷つけた相手を赦す始めの一歩は、まず自分の心に刻まれた傷を認める事。「なぜ自分は傷ついたか」「どのように傷ついたか」神に祈り明らかにしていただく。心に傷があれば「悲しみ」「怒り」「不安」の感情が発生する。次のステップは、信頼でき、安心できる人を祈りつつ慎重に選び、その安全な関係性の中に自分を置く。人選を間違えると、その相手により、さらに傷つけられるので、安全な相手を祈り求める。安心できる人とは、心に傷があり、相手を赦せないで苦しんでいる私をすぐに正さず、裁かず、ありのまま受け止めてくれる人。神は備えて下さる。自分の正直な心の思いを打ち明ける時、その

苦しみに寄り添い「つらいですね。私も同じですよ」と心から声をかけてくれる人。その様な安全な関係の中で、相手の助けを借りながら、自分の心の痛みを、そこにある「悲しみ」「怒り」の感情と共に十分味わう。そして安心できる相手に受け入れられ、優しい言葉をかけられ、少しだけ癒やされた傷を、もう一度自分の心の中に収める。このような交わり、プロセスの中に寄り添い交わっていて下さる「慰め主」の御聖霊が働かれ、少しずつ傷が癒されていく。赦すために、必ずしも自分を傷つけた人と直接に話す必要はない。遠い過去の傷で苦しんでいる場合、相手はすでにこの世にいない場合もある。最終的に自分の心の傷を癒すのは、自分を傷つけた人ではなく、また、安心して相談した人でもなく、慰め主の御聖霊。赦すとは、自分を傷つけた人を変える事ではなく、相手を赦せない心を持つ自分を安心できる関係を用いられるご聖霊により自分を変えていただく御業。自分の愛や力では人を赦せない私たちを理解した上で神は、あえて人を赦すことを求められます。人を赦さないままでいると、自分の心も傷ついたままだからです。つらく時間のかかるプロセスの向こうには、神に喜ばれる、より成長した人の姿があるから。人を赦せない思いを味わうことは、より深い神の憐みと恵みに気付かされる。少しずつでも人を赦せるようになった自分の姿を見ることは、不可能を可能にして下さる神への信頼につながる。

２．神に赦された恵みは、人を赦す神のみこころにつながる。本日の主の祈り「わたしたちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」：１２。以前の文語訳では、「我らに罪を犯す者を、我らが赦すごとく」となっていた。これは、次の誤解を与えてきた。「私たちが他人の罪を赦しますので、私の罪も赦してください」という祈りだと。そう理解すると心から祈れない時がたびたび出てくる。なぜなら、誠実なキリスト者ほど、他の人を完全には赦していないと気づかせられることがあるからである。※お二人の証し。しかし、主が教えられたこの祈りは、神に条件を提示しているわけではない。自分が他の人を赦しますので、その代償として私も赦してくださいという意味ではない。その逆である。神が、これまで私たちの数え切れない罪を赦してくださったので、私たちも他の人を赦すべきですという祈りである。マタイ１８：２１－３３において、主君から１万タラント（一生働いても決して返済できない額）の負債を免除してもらった人が、一人の仲間に出会い、彼は、その仲間に、自分が免除してもらった額の６０万分の１の少額を貸していた。彼は、その仲間の負債を免除しないどころか、返済しない仲間を牢に投げ込んだ。その後、この人は、主君から言われる。「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか」：３３と。これこそ、主イエスが主の祈りで教えられた原則。神によって赦された者は、人の罪を赦すのがみこころ。これは、全く当然のことである。私たちは、マタイ１８章に登場する仲間を赦さず、牢に放り込んだ人を「なんてひどいやつだ」と思う。しかし、自分のことはそう思わない。神に数え切れない自分の罪を赦された私たちが人を赦せないなら、「なんてあなたは、ひどい人だ」と言われても仕方がないのである。それほど私たちは、自分への量りと人への量りが違う。「あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤りで量り与えられるのです。あなたがたは、兄弟の目にあるちり（小さな罪、欠点）は見えるのに、自分の目にある梁（大きな罪、欠点）には、なぜ気がつかないのですか」マタイ７：２，３。私たちが与える人への赦しは、神が私たちに与えてくださった赦しに比べれば、取るに足りないものである。

Ⅲ「互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい」コロサイ３：１３。私たちも、神の光を心に当てていただき、自分の心を深く点検しましょう。私には、まだ赦していない人はいないだろうか。すべての人を赦しているか。だれかに、とげが刺さった苦々しい思いを抱いていないか。今、私はどうか？いつもねたみ気になる人、顔を合わせたくない人。身近な人ほど赦し難い。もし、自分は主から赦され続けているのに、ある人を赦していない罪を御聖霊に示していただいたら、まず心の中で「赦します。赦す愛を下さい」から始めたい→ルカ６：２８。証し。そして、自分の力では無理と認めて、父なる神の大きな愛、主の十字架の恵み、聖霊の交わりの実である愛の力を祈り求め「赦します。心から赦せますように」と主の祈りで祈りましょう。私たちには無理でも神は私たちに赦す心を与えることがおできになります。